

燃え盛る炎の中で、少しずつ熱くなってくる青銅の鐘の中に、安珍は、坐禪を組んでいる。

苦しみ……苦しみ……お前の犯した罪は、この程度ではすまぬのだ……安珍は、自分に言い聞かせている……。

熱い空気が、安珍の体毛をちりちりところがす……。

息をすれば、肺の中が焼けるようだ……。

しかし……まだ、気を失うわけにはいかない。

安珍は、懐の中に、大事にしまっていたナギ人形を取り出した……。

今……鐘の中は、熱でぼんやりとした赤い光を放っている……。

暗がりの中に……

ナギ人形の墨で描かれた

目鼻がうつすらと

見える。

姫……

清姫

……

俺は、これを君に

渡したかった

……

どんなに俺は……

君を愛していただろう……。

それなのに……どうして、俺は、

君の気持ちをわかってやれなかったのだ……。

意識が混濁する……その度に、安珍は、気をふるい起たせる。

身体中が、プスプスと焼けていくのがわかる……。

姫……清姫……あどけない……清姫の顔が笑っている。

姫……迎えに来てくれたのか？

安珍の手の中のナギ人形が、一瞬、ポツと光を放って燃えた……。

